

福岡県久留米市の田主丸町竹野地区を襲った土石流の状況

# 途中で分岐し警戒区域外へ

## 流木、家屋や立木が壁に

今年7月10日の大雨によって福岡県久留米市田主丸町で発生した土石流は、設定されていた土砂災害警戒区域からあふれ出す形で被害を広げた。地盤工学会の現地調査団の分析で、竹野地区の集落に

最初に到達した流木が家屋や立木にせき止められて壁となり、その後襲ってきた土石流を東西2方向に分岐させたため、域外流出につながったことが分かった。  
(特別編集委員・長谷川彰)

### 地盤工学会調査団が指摘

調査団によると、竹野地区の背後にそびえる耳納山では、6時間雨量や12時間雨量が1988年以降で最大を記録。このため、千ノ尾川の最上流部で斜面が崩壊して土石流が起きた。

調査団の一員、福岡大の村上哲教授(防災地盤工学)によると、千ノ尾川は、山の斜面の途中で、東側の谷からと西側の谷からの溪流が合流してきており、土石流は西側溪流で発生。合流地点の下流部では東側溪流からの流出水が加わり、土石流の勢いが増したと考えられるという。

調査団に加わった九州大学院の等間清伸教授(地盤工学)は「警戒区域の線

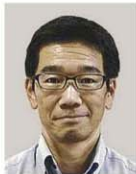
引きをどこまで綿密にするのか、判断は難しい」と話す。近年は雨の降り方が激しくなっており、警戒区域を指定した時の想定を超える規模の土石流が起きる恐れもあるとして「警戒区域の外側に住んでいる人も、大雨に関する予報が出たときは、早めの避難行動をとれるよう心構えが大切だ」と注意を促している。

### 来月、熊本市で住宅地盤相談会 地盤品質判定士会九州支部

### 「盛り土問題にも対応」

地盤品質判定士会九州支部は11月に熊本市のグランメッセ熊本で催される「先進建設・防災・減災技術フェア」の会場で、住宅地盤に関する講演会と相談会を開く。等間清伸支部長(九州大学院教授)に、宅地の安全性確保に関する取り組みについて聞いた。

箕間清伸 支部長に聞く



九州支部が発足して半年。市民の反応は、福岡、熊本、大分などから相談が寄せられた。やはり、「自分が今、住んでいる土地は大丈夫か」という質問が多い。それぞれに助言をしながら、地盤品質判定士のニーズがどこにあるのか、リサーチにもつなげている。

静岡県熱海市で2021年に盛り土造成地が豪雨で大崩落して土石流災害となった。盛り土の安全性に関しても対応するのか。

政府は熱海の災害を踏まえ、宅地造成に関する規制法を抜本改正し、盛り土規制法として対応を強化した。民有地も含め、すべての盛り土造成地を再点検し、必要なら対策を行う流れとなっている。先行して調査が進められてきた大規模盛り土造成地も併せて、行政が包括的に安全点検に取り組むことになると思う。

点検の結果、ただちに危険だとは言えなくても継続監視が必要な場合、「住民任せにされる」となれば、地盤品質判定士が監視活動を支援する。

九州支部による地盤品質相談会は11月21、22両日、午前10時から。事前の申し込みを受け付けるが、当日参加も可。講演会は22日午後1時10分から。「地盤品質判定士のプラタチ」と銘打ち、テレビの人気番組風に街歩きで見られるさまざまな事例を紹介し、宅地トラブルを予防・軽減するための提案を行う。相談会、講演会とも無料。詳細はQRコードから。

